

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：12101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K16593

研究課題名(和文) フランスの少女向け雑誌における少女文化の形成についての実証的研究

研究課題名(英文) Empirical study on the formation of girl culture in French girls' magazines

研究代表者

猪俣 紀子 (inomata, noriko)

茨城大学・人文学部・准教授

研究者番号：20734487

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1970年前後のフランスの少女向けフレンチコミック(バンドデシネ BD)掲載雑誌のコンテンツ分析を通して、日本の少女マンガ雑誌の隆盛の歴史と比較しながら、フランスの少女文化の形成と雑誌というメディアの関連を明らかにすることを目的とした。実際の掲載内容を分析すると、日仏において、学校制度により少女向け媒体が発展していくという共通点が見られた。しかし、日本では男女の雑誌がテーマなどに影響を及ぼし合いつつ、それぞれが少年/少女マンガらしく消化された表現で展開されていた。それに対して、BD作品においては少女向けメディアが少年向けに取り込まれている傾向が見られた。

研究成果の概要(英文)：This study, through content analysis of French comic books for French girls (bande dessinée[BD]) around 1970, compares with the history of prosperity of Japanese girls' manga magazine, aimed to clarify the relation of the French girl magazine and the forming French girl culture. When analyzing the actual contents of publication, in Japan and France, there was a common point that the medium for girls develops by the school system. However, in Japan, men's and women's magazines influenced themes and others, and each was developed with expressions digested like boys' / girls' comics. On the other hand, in BD works, media for girls tended to be included for boys.

研究分野：マンガ

キーワード：バンドデシネ マンガ 少女マンガ雑誌 少女BD雑誌

## 1. 研究開始当初の背景

日本とフランスの二国における少女文化形成を少女向け雑誌から分析しようと考えたのには、日仏の以下の二つの状況があったためである。

(1) 日本における少女マンガと少女文化の関係性

少女雑誌や少女マンガ雑誌が少女文化に及ぼした影響については言及されることはしばしばあり、たとえば本田和子は『女学生の系譜 彩色される明治』(1990年)で吉屋信子の独特な表現を使用した少女小説に酔う少女たちの存在を指摘し、読者投稿欄にペンネームを用いて少女幻想共同体を作ったと述べた。また、大塚英志は少女マンガ雑誌のふるくを取りあげた『“りぼん”のふるくと乙女ちっくの時代』(1995年)のなかで『りぼん』のふるくがファンシー化を開始するとき、80年代の消費社会誕生と結び付けて当時の女の子たちの光景を描きだした。また飯沢耕太郎は『戦後民主主義と少女漫画』(2009年)で、中高生の少女が少女マンガ家として、少女の夢を読者と共有し、少女マンガを囲い込んでいく様子を「少女による少女のための純粋少女漫画」の誕生と評した。少女雑誌、少女マンガ雑誌は極めてジェンダー化されたメディアであり、少女文化を形成する重要な要素の一つとなっていることがわかる。

日本は世界的に見ても少女向けのコミックスが非常に発展した珍しい国となっている。少女雑誌における中原淳一や藤井千秋といった抒情画家や、70年代以降に少女雑誌がマンガのページ数を急激に増やして少女マンガ雑誌へと変容していくなかで、これらの少女向けのメディアは少女たちにとって夢を見させる装置となり、大きな影響を与えていたことが明らかにされてきた。

(2) フランスにおける少女向けBD、少女向けBD研究の不在

フランスではフレンチコミックス(以下BD)は長い間男性向けの読み物と認識され、女性向けのBD作品はほぼ作られてこなかったといっている。しかし少女向けのBD掲載メディアがなかったのではなく、むしろ20世紀初頭から週刊で刊行され人気を博していた。しかし1970年代になると、男女共通のBD雑誌や女性向けモード誌に取って代われ、少女向けに特化したBD雑誌は姿を消す。

その後男性向けのBDは発展を続け、近年アカデミックにBDを研究する動きも始まっている。ティエリ・グルンステンの『マンガのシステム』(2009年)のように、BD表現の仕組みについて分析した研究や、BDの始祖と目される19世紀前半のスイスの作家、ロドルフ・テプフェールの作品集や、彼が執筆した観相学の研究書は復刻され、日本でも邦訳され出版されている。また日本のマンガについての研究も始まったところで、ジャン

=マリー・ブイッサーの『MANGA』(2010年)のような漫画の歴史を追ったものや、クリスティヌ・デトゥレとオリヴィエ・ヴァネによる『Les mangados』(2012年)のように思春期のフランス人にインタビュー調査を行った社会的なものもある。しかしかつて存在した少女向けのBDについて現在言及されることはフランスにおいてもまれで、「Béccasine」のような人気のあった作品がわずかに復刻されることはあっても、少女向けBD研究はほぼなされてきていない。

以上の状況から、日仏のメディアの歴史に注目することで、新しい問題提起ができると思った。

## 2. 研究の目的

日本とフランスにおいて、少女雑誌が少女文化形成にどのような影響を与えてきたかを分析することで、マンガ研究にとどまらず、少女文化について多面的に捉えることを目指すものである。

フランスの少女BD雑誌が総じて廃刊に至った理由は、日本の少女マンガ雑誌のように、少女文化の形成に強く影響を与えきれていなかったからではないか。そしてそれが日本のポピュラー・カルチャーや少女文化の流入によって、フランスの少女特有の文化の存在感の弱さが浮かび上がってきたのではないだろうか。日仏の両雑誌にとって雑誌の過渡期である1960年後半から70年前後にかけてフランスの少女向けBD雑誌に注目し、それが描いてきたもの/こなかったもの解明することで、フランスにおける少女文化の形成の一端を明らかにする。

本研究は従来のマンガ研究、メディア研究、地域研究の視点を持ちながらも、それらがいずれも取り組んでこなかったフランスの少女向けメディア(BD雑誌)を対象とし、少女向けメディアと少女文化形成の関係を問う点に特色がある。

本研究によって予測される結果は、フランスの少女向けメディアと少女文化形成の関連/非関連性を明らかにし、フランス特有の少女文化の変遷の様相の一端を照らし出すことによって、マンガ研究、メディア研究、地域研究の3分野にあたらしい視点を持ち込み、さらなる研究へと開いていく点に意義がある。

また、この成果は日本における少女文化、世界で享受されている少女向けポピュラー・カルチャーをフランスというヨーロッパの地域研究から逆照射して、日本の少女向けメディアと少女文化形成について比較研究の視点から、新たな研究を進める一歩となるであろう。

## 3. 研究の方法

フランスの少女向けに出版されたBD雑誌のなかで、なにがBDに描かれているのか、ジャンル、テーマ、舞台設定などがどうなっているのか、雑誌のほかのコンテンツの掲載内容も調査しそれが少女たちの文化形成にどう影響を与えているのか、日本の少女マンガ雑誌の場合と比較しながら考察する。まず、20世紀初めに創刊された少女BD雑誌を収集し、その掲載内容を把握する。

フランスの少女BD雑誌にはBD、小説、手芸、時事問題などの情報、読者投稿欄などが存在した。BDは20世紀初頭の創刊当時からながらく、2ページ程度の連載が続いていた。それが60年代になると長いものでは8ページくらいに増えるものの、それ以上の増加は見られないまま終わる。それにはそもそもフランスの少女BD雑誌のページ数が16ページから始まった週刊ペースの薄い冊子形式の形態で出版され始め、その形態に大きな変化が起ころなかったことも要因と考えられる。(猪俣紀子「フランスの少女向け媒体におけるBD」、『国際マンガ研究 vol.1』、2011年)大判化し、マンガのページ数が急激に増え厚いマンガ雑誌になって少女の夢に夢を見させる装置となっていった日本の少女マンガとのちがいはどのように生じていったのか、その内容からフランスの少女たちの興味関心がなんであったのか、また掲載内容がどう変遷し、それに対して少女たちはどのように反応していたのかを考察する。日本の少女マンガ雑誌の場合を念頭に置きながら、フランスの少女向けメディアがどう少女文化の形成に結び付いてきたかを明らかにする。

とくに、日本の少女マンガ雑誌が少女マンガとして、少年マンガと表現においても、テーマにおいても差異化していく60年代後半から70年代は、フランスでは少女向けBD雑誌が廃刊していくという、日本とは逆の動きが起こっている。この時期の雑誌を重点的に分析することで、双方の違いも明らかになり、日本の少女マンガの特徴も海外との視点からあらたに明らかになる点もあると期待される。

フランス特有の少女向け文化は少女向けメディアの中で形成されてきたのか、そうではないのか、日本の少女向けメディアと比較しながら、フランスの少女向けメディアと少女文化形成の関連を解明したい。

本研究は従来のマンガ研究、メディア研究、地域研究の視点を持ちながらも、それらがいずれも取り組んでこなかったフランスの少女向けメディア(BD雑誌)を対象とし、少女向けメディアと少女文化形成の関係を問う点に特色がある。

本研究によって予測される結果は、フランスの少女向けメディアと少女文化形成の関連/非関連性を明らかにし、フランス特有の少女文化の変遷の様相の一端を照らし出す

ことによって、マンガ研究、メディア研究、地域研究の3分野にあたらしい視点を持ち込み、さらなる研究へと開いていく点に意義がある。

また、この成果は日本における少女文化、世界で享受されている少女向けポピュラー・カルチャーをフランスというヨーロッパの地域研究から逆照射して、日本の少女向けメディアと少女文化形成について比較研究の視点から、新たな研究を進める一歩となるであろう。

#### 4. 研究成果

本研究は、1970年前後のフランスの少女向けBD掲載雑誌のコンテンツ分析を通して、日本の少女マンガ雑誌の隆盛の歴史と比較しながら、フランスの少女文化の形成と雑誌というメディアの関連を明らかにすることを目的とした。

日本とフランスで、少女読者に特化した雑誌の創刊には、それぞれ学校制度の整備との結びつきが影響していた。日本の高等女学校令の発布(1899年)、フランスの各県の師範学校設置の義務化(1878年)、女子師範学校の設立(1880年)など、20世紀初頭より少女向けのメディアが続々と出版された。少女雑誌の萌芽には日仏で同じような社会背景を持っていたといえる。

二国において少女雑誌はそれぞれ発展を遂げるが、60年代からフランスでは廃刊、他雑誌への統合の動きがみられる。その理由としてそれまでの情操教育のための物語が描き続けられたこと、少年少女を区別する文化的差異がなくなっていく、少女向け専門雑誌の存続が難しくなったことが指摘される。

実際の掲載BDの内容を分析すると、雑誌における少女向けBD作品数の掲載ページ数は増加することがなく、また掲載BD作品ジャンルの変化をみると、「歴史」「冒険」などをテーマとし続け、日本の「生活」「スポーツ」というテーマから、「恋愛」に集約され、少女読者の共感を得て、少女雑誌が少女マンガ雑誌になっていく経緯とは異なる傾向がみられた。

またフランスでは「SF」という70年代に男性向けに勃興した新しいジャンルが、少女向けでも掲載されていた。男女の雑誌がテーマなどに影響を及ぼし合うことは、日本でも「ラブコメ」「スポ根」など確認されるが、それぞれ少年/少女マンガらしく消化された表現で展開されていくことなく、BDにおいては少女向けメディアが少年向けに取り込まれている傾向が見られた。

フランスの少女雑誌は教育的要素に加えて、カトリックの宗教的な要素を取り入れる出版社によって作られることも多く、商業的に少女たちの娯楽に対する欲求を満たす点を担うことは容易ではなかった。フランスの

少女雑誌は長期間刊行されたものもあったが、日本の場合と比較すると、少女作家によって描かれる少女マンガの登場、雑誌の中でマンガ作品数の増加、少年マンガからの影響を受けたジャンルの多様化など、少女向け媒体が独自に発展し、少女文化が形成される画期を有することができなかつた点が明らかとなった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

増田のぞみ、猪俣紀子「少女マンガ雑誌における『外国』イメージ - 1960~70年代の『週刊少女フレンド』分析より - 」『甲南女子大学研究紀要』甲南女子大学 53, 89-98、2017、査読無

猪俣紀子「1970年前後の日仏少女マンガ雑誌の比較」『女性空間』日仏女性研究学会 33, 84-95、2016、査読有

増田のぞみ、猪俣紀子「少女マンガ雑誌における『外国』イメージ - 1960~70年代の『週刊マーガレット』の分析より - 」『甲南女子大学研究紀要』甲南女子大学 52, 41-49、2016、査読無

〔学会発表〕(計 3件)

猪俣紀子、『フランス・ストーリーマンガ史と日本』第469回日仏学史学会 2016/01/23、日仏会館(東京都・渋谷区)

猪俣紀子、『フランスの少女向けバンド・デシネ雑誌の変遷』第15回中部人間学会 2015/11/28、仁愛大学(福井県・越前市)

猪俣紀子、『1970年前後の日仏少女雑誌の比較』第9回日仏女性学会会員研究発表大会 2015/07/18、日仏会館(東京都・渋谷区)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

猪俣 紀子 (INOMATA NORIKO)  
茨城大学・人文学部・准教授  
研究者番号 20734487

研究者番号：

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

( )